

世界への視点

ベストセラーの反響が意味するもの 国民国家イスラエルへの疑問

ジャーナリスト 榎 彰

2004年ベツヘレム、イスラエル入植者によって退去を余儀なくされたパレスチナ人の住居（撮影・亀山亮）

両親の移住とともに幼いころにイスラエルへ渡って、この地で育った大学教授が出版した歴史書がある。テルアビブ大学シロモール・サンド教授の二〇〇八年の著書『ユダヤ人の起源 歴史はどのように創作されたのか』は、欧米で反響を呼ぶベストセラーになった。続いて注目を集めたモントリオール大学ヤコヴ・M・ラブキン教授の著書『トラーラーの名において』。これらユダヤ人歴史家たちの書に、なぜ世界の注目が集まったのか。その背景に見えてくるイスラエルをめぐる新たな世界の動きについて、中東を深く見詰め続けてきたジャーナリストの榎さんに解説してもらった。

「国民国家」の統合力の衰え

米国のオバマ政権が中心になって、今度こそ本格的な中東和平工作を展開しようとしているように見える。十一月の米国の中間選挙に向けた、スペクタクルめいた政治ショーではないのかと冷ややかに見る向きも少なくない。

しかし中東に関する限り、いろんな状況は気がつか

ない間に一変している。「国民国家」の政治的統合力の衰えが、中東地域を中心に覆えなくなってきたのである。それがユダヤ教、キリスト教、イスラム教など一宗教を中心に、宗教と現実政治とが絡み合い、複雑な展開を見せるようになってきた。現実政治と宗教とを峻別しようとしたイスラエルのナシヨナリズム、つまりシオニズムの試みに対する宗教的反発が絡み、思わぬ方向に発展しようとしている。

これまでとはちよつと違った観点から、国民国家の視点に立ち、宗教の政治との絡み合いという見方から、改めて状況を見直してみたい。

中東の鍵を握る問題としては、パレスチナ問題、パレスチナをめぐるイスラエルとアラブとの対立という面が浮き彫りにされ、これに米ソの冷戦、特に米国の介入が、問題になってきた。冷戦の終結後、二十年経っても、この対立の図式は一見したところ変わっていない。

ところが、すでにアメリカでは、前回大統領選挙のあった二〇〇八年、イスラエルのテルアビブ大学のシロモール・サンド教授による『ユダヤ人の起源』が出



こうき社/武田ランダムハウスジャパン 3,800円

ているが、ここでシオニズムのよって立つ基本盤に、根底から疑問を提出している。

版され、続いてカナダのモントリオール大学のヤコヴ・M・ラブキン教授が、『トラーラーの名において』を出版した。『ユダヤ人の起源』の英訳は、長いことベストセラーになったという。これをきっかけにシオニズムをめぐる根源的な反発が活発化した。十五カ国語で翻訳されたといわれ、世界的にも論議を巻き起こした。日本では今年の前半に二冊の日本語訳が出版され、パレスチナ問題が中心だった中東論議に別の視点があることを改めて示した。

オバマ大統領が当選した秘密の一つが、この本の背景に流れているのではないかと見たくもなる。〇四年の選挙で、ブッシュ大統領に近いキリスト教福音主義派が、ユダヤ教シオニスト・グループと一緒に、ブッシュ再選に力を尽くしたというのが定説になっているからだ。サンド教授は、ポスト・シオニズムを唱